

|            |                                       |     |             |
|------------|---------------------------------------|-----|-------------|
| 氏名(本籍)     | 榑田宏治(山口県)                             |     |             |
| 学位の種類      | 博士(美術)                                |     |             |
| 学位記番号      | 博美第26号                                |     |             |
| 学位授与年月日    | 平成4年3月25日                             |     |             |
| 学位論文等題目    | 〈作品〉キャンパス空間における造形作品(東亜大学の場合)<br>〈論文〉〃 |     |             |
| 論文等審査委員    |                                       |     |             |
| (主査)       | 東京芸術大学                                | 教授  | (美術学部) 大藪雅孝 |
| (論文担当第一副査) | 〃                                     | 〃   | ( 〃 ) 武藤三千夫 |
| (作品担当第一副査) | 〃                                     | 〃   | ( 〃 ) 前野 崑  |
| (副査)       | 〃                                     | 助教授 | ( 〃 ) 宮下安弘  |
| ( 〃 )      | 〃                                     | 〃   | ( 〃 ) 本間紀男  |
| ( 〃 )      | 東亜大学                                  | 教授  | 橋本良雄        |

## (論文等内容の要旨)

本研究論文のテーマは「キャンパス空間における造形作品」と題し、第一部作品篇とそれに関する第二部論攷篇の二部からなる。それらは相互に密接に関連し、補足し合う。

作品篇は、空間におけるデザイン行為としての造形の問題を、キャンパス空間に作品群として具体的に設置し、提案したものである。

論攷篇は、個々の作品制作にあたっての意図や、具体的な造形として創造的解決を図ったその過程を回顧し、造形作品が果たす空間における意味を考察したものである。したがって研究の視点は、キャンパス空間全体の総合性から造形の解決を図るというよりは、むしろ空間の中に制作者たる自己を据え、そこにおいて自己と空間と作品とが共に呼吸するという制作姿勢におかれている。

本研究の研究内容は、それぞれ項目別に以下のように示される。

## 『キャンパス空間における造形作品(東亜大学の場合)』

## [第一部・作品篇]

- A. 校門門扉
- B. 校門前広場モニュメント
- C. 2号館教育棟壁画
- D. 9号館体育館棟ロビー壁画
- E. 2号館教育棟多目的ホール緞帳  
(補足作品)

## [第二部・論攷篇]

ここでは、〈作品の意図〉〈設置空間〉〈制作遂行〉の主題別に各々の作品を考察した。

- I 序文
- II 造形作品の計画と制作および設置の状況
  - A. 校門門扉
  - B. 校門前広場モニュメント
  - C. 2号館教育棟壁画
  - D. 9号館体育館棟ロビー壁画
  - E. 2号館教育棟多目的ホール緞帳
- III 総論

次に[第二部・論攷篇]の内容を論述にしたがって説明する。

## I 序文

制作者は造形作品の制作理念について、作品が人と人、人との、人と自然をたんに繋ぐばかりではなくて、その「繋ぐ」行為自体の中に「弛み」の部分を包含することが重要であると述べている。そしてさらに、そこでの具体化が、実際のキャンパス空間の中に積極的に生かされるべきであり、このことの実現が東亜大学の造形作品設置の計画において遂行された、という。その成果と背景を叙述することによって、制作者は、自らの造形への問題意識の核心一すなわち、空間を「生かす」ことによって初めて自己自身も「生きる」ことができると

いう造形主体たる「私」と対象との根源的関係—を改めて認識する結果になったその経緯を明らかにしようとしている。

## II 造形作品の計画と制作および設置の状況

A. 「校門門扉」 ここでは、まず制作者がキャンパスの内と外とをたんに明確に隔てる物理的機能に反して、学問共同体の志を有するものへの呼びかけ、および覚醒を視覚化しようとした。そのために、面の透過性を最大限に生かすことによって、社会と大学アカデミズムが開かれて結ばれうる、その繋ぎ（結界）の意味表現を目指し、それゆえに文字をカリグラフィーによって処理し、門扉に配した、その過程について述べている。

B. 「校門前広場モニュメント」 ここではまず、制作者は「哲学」「科学」「技術」「芸術」の学問分野の一つの学内に充実させる建学の理念を形象化しようとしたと述べている。そして周辺広場について、それは小規模ながらその周囲にくつろぎの場を提供するべきものであるとし、このような自然空間に置かれる造形物としてのモニュメントこそが、自然環境との調和と、地形からくる構造と大きさについて配慮されたものであるとした。またこのような空間が、奉仕・健全の精神を反映したものであると主張しつつ、モニュメントの造形化がその精神によってもたらされたこと、特に、扇（末広）型および五徳の形からヒントをえて、具体的造形に至った状況とその視覚的効果について述べている。

C. 「2号館教育棟吹抜け壁画」 ここでは、まず制作者はこの大学の教育・研究の場が「哲学」「科学」「技術」「芸術」を包含するものであることのその象徴として、人間を含む森羅万象の造形化を試みたこと、とりわけ「人間・世界」というテーマにしぼって、二面の壁画に仕上げたと述べている。さらに、設置空間である吹き抜けが各フロアごとに断絶され閉ざされた空間にならないように上下相互の空間的なつながりを持たせ、見え方の点から十分効果的足らしめるよう考慮した。その結果として、強くシンプルな色と形態による空間の他との調和と広がりを出した、その経緯について説明している。

D. 「8号館体育館棟ロビー壁画」 ここではまず、制作者は人の動きをテーマとし、それを並列することでもたらされる装飾性と多様性によってロビー空間全体の広がり調和を意図し、同時にこの自然光に満ちた空間に、ある種の「透明感」を具体化したと述べている。さらに、その具体化のために、「壁画」によって空間を遮

断し、これによって囲まれた空間としてのまとまりを機能させつつ、瞬間にその「壁画」を突き抜ける光の透過構造に従ったとしている。「壁画」は強い「線」で強調され、この抽象化された「線」は、壁面に強い抵抗感と緊張感を与えることになった。このことが床大理石の質感の強さと呼応し、同時に床面に映る壁画面はこのロビー空間に天地への広がりをもたらしめた。論者は、このように周囲環境との融合を十分考慮した過程について述べている。

E. 「2号館教育棟多目的ホール緞帳」 ここではまず、制作者はこの緞帳について、我々の前に立ちはだかる壁としてではなくて、世界のかなめとなるものとしてイメージし、形象化しようとしたと述べている。さらに、色彩のぼかしにより、5色の相互親和（すなわち「横の広がり」）を獲得すると同時に、緞帳という障壁を越えた、こちら側の空間と向こう側の空間との相互浸透性（すなわち「高い次元での空間の広がり」）をえようとしたという。そして、このように全体にはっきりした形態を用いないことによって、かえって未知なるものへの予感と流動する社会への対応を象徴しようとした造形意図について触れている。

## III 総論

ここで論者は、制作者の造形に対する姿勢として、たんに空間を合理的機能的意味でのみ捕らえるというばかりではなくて、また抽象的な一般論としての形式的な造形思考からも離れて、具体的な空間に自己自身を据え、いかにその空間内において自己自身が生の意味を獲得しうるかを考えたとしている。その結果として、造形作品はその空間に固有な必要不可欠ななんらかの美的機能を与えるという。ここでいう空間の美的機能とは、人間の生の中において空間がいわば息づく「いのち」の部分であるという。こうして、それぞれの空間に備わる「いのち」を掘り当てるために、あるいは「いのち」を賦与するために、制作者は、作品制作の過程において最大限の努力をしたという。

また最後に論者は、その制作過程を回顧しつつ、作者の制作と作品の在り方について次のように総括的に述べている。すなわち、①「作品群の中に流れる理念が全体として一貫していること」。②「空間に個有の輝きをもたらしたこと」。③「現場重視の立場を通じたこと」。このことについて論者は、「作品の自己生成の場に関与する」という姿勢でしか、制作者として、造形を結晶させ、その空間に解答を与える術を待たなかったとしてい

る。④「色彩の抽象性を空間機能に対応させたこと」。  
⑤「線による展開のみがその線の遊戯性を挑発したこと」。  
⑥「素材表面の向こう側に流れる時間性を感知すること」、  
などである。

最後に論者は、「繋ぎ」の可能性を内に秘めた、開かれた場としての「透き間」について論じ、このことを通して空間・デザイン・造形についての自らの認識の問い直しと反省を行っている。